笹沢左保

三種の神器殺人事件

さんしゅじんぎ

NON NOVEL

長編推理小説

壇ノ浦

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定(ノン)〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説(フィクション)を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—59

長編推理小説　三種の神器(じんぎ)殺人事件

昭和52年4月15日　初版第1刷発行

著者　笹沢左保(ささざわさほ)

発行者　黒崎勇

発行所　祥伝社(しょうでんしゃ)
〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081

発売　小学館

印刷　堀内印刷　製本　ナショナル製本

万一，落丁・乱丁がありました場合は，お取りかえします。　Printed in Japan
© Saho Sasazawa, 1977

長編推理小説

芦沢左保

種の神器殺人事件

NON NOVEL

祥伝社

目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

東京　その一　7
喜多方（きたかた）市　その一　35
喜多方市　その二　62
関（せき）市　その一　88
関市　その二　114

西都（さいと）市　その一　141
西都市　その二　167
東京　その一　194
東京　その二　221

カバー構成・坂野　豊＋松島正矩　写真撮影・森本　宏
本文イラスト・伊勢田邦貴

東京 その一

1

場所が違ったように、静かであった。

雨が降っているせいである。晴れていれば、まず競い合うように蟬が鳴く。それに、隣の幼稚園の園児たちが、小さな運動場で大騒ぎをしながら遊び回ることになる。だが、雨降りでは蟬も沈黙するし、幼稚園の子どもたちも屋外では騒がない。

今日は朝から、病院らしく静かな雰囲気であった。しかし、雨の日の病院は、何となく陰鬱である。特に、病人は気が滅入る。妙に人恋しくなって、誰か見舞いに来てくれないだろうかと、しみじみ思ったりする。

春日多津彦も珍しく、見舞い客を期待していた。外科病院二階の特A号病室は、個室であった。広い病室でベッドのほかに、応接セットが置いてある。白いカバー付きのソファと椅子が二脚、それにテーブルであった。

あとは浴室にトイレ、付添人用の小部屋である。付添人用の小部屋には、炊事の設備や冷蔵庫などが取り付けてあった。特A号というのは、この病院の最高の病室なのだ。病人だろうと、ベッドの上にだけいるのが馬鹿らしくなるような病室であった。

それに春日多津彦は、もう病人という気持ちではいられなかった。自由に歩けるし、身体のどの部分にも痛みは残っていない。当人は全治したものと、勝手に診断を下している。ただ主治医からの退院許可が、出ていないだけだった。

しかし、理由によっては外出許可はもらえるだろうと、看護婦たちも言っていた。つまり、そこまで身体が、恢復しているということなのだ。大事をとって、退院を延ばしているにすぎない。

朝食のあとで、病室の掃除がある。そのときに、春日多津彦はベッドを降りた。それっきり、彼はベッドに戻っていない。パジャマ姿で病室の中を歩き回ったり、体操をしたり、ソファにすわったり、窓の外を覗いたりで

あった。

何とも、退屈で仕方がない。それに、人恋しかった。二十九歳の男の肉体が、鈍ることを恐れている。もともと精力的な行動派である春日多津彦にとって、退屈は一種の拷問でもあった。

病室には、テレビも電話もある。だが、昼間のテレビは、見る気がしなかった。電話をかけても、相手は留守に決まっている。男は誰もが、働いている時間なのだ。そう思うと自分だけが取り残されたようで、焦燥感さえ覚えるのであった。

春日多津彦は、窓際に立った。激しくはないが、密度の濃い雨のようである。夏の雨にしては、しつこくて、昨夜から小やみなく降り続いている。空の雲の色と厚さから推して、間もなく晴れることは望めそうにない。

南に多摩川、東に小田急線の和泉多摩川駅がある。だが、多摩川も駅も、病室からは見えなかった。気にならない程度に、小田急線の電車の音が聞こえるだけだった。この私立の総合病院は、都下狛江市の和泉の南東の端に位置している。

かつての郊外を思わせるように、閑静で緑の多い一帯であった。北側に幼稚園が隣接していて、南西に都立高校があるほかは、新しい家が多い住宅地であった。この総合病院自体も、古い建物ではなかった。

私立なので、大学病院のように大きくはない。鉄筋三階建の病棟が二棟と、二階建の病院そのものが、欅と銀杏の林に囲まれている。その林の緑が、雨に濡れて鮮やかであった。

見舞い客は、期待できなかった。大勢の人々が病室を訪れたのは、入院してからの半月間だった。その後は、ごく親しい友人、上司、同僚が、思い出したように訪れるだけである。二カ月もたつと、それも来なくなる。

もう見舞う必要がないほど、元気になったと思うからだろう。自分たちより健康そうだと、はっきり口に出して言う見舞い客もいるくらいだった。この一週間、病室を訪れた客はひとりもいなかった。

春日多津彦には、肉親という者がいない。独身だから、妻子もいなかった。それだけに毎日、病室へ顔を出す人間がいないわけである。病院へ通って来るような、恋人という気の利いたものもいないのだ。

間もなく十一時三十分、昼食の時間であった。春日多

津彦は、ぼんやりと地面の水溜りを見おろしていた。身長一メートル八十センチ、体重八十一キロという大きな身体を、完全に持て余しているという感じだった。

ドアが、ノックされた。

「どうぞ」

春日多津彦は、無愛想に背中で応じた。看護婦が、食事を運んで来たのだろうと、思ったのであった。だが、看護婦の明るい呼びかけの声は、聞こえなかった。春日多津彦は、初めて振り返った。

「ああ、どうも……」

春日多津彦は、恐縮して向き直った。ドアの前には、三十七、八の男が立っていた。夏ものの背広姿で、レイン・コートを抱えている。

「近くまで、来たんでね」

男は、表情を動かさずに言った。

「すみません」

春日は、頭を下げた。待望の見舞い客のはずなのに、春日は特に嬉しそうな顔をしなかった。その見舞い客は、長居をしない。もう十回ぐらい春日の病室を訪れているが、ソファにすわったことは一度もなかった。

今日も、十五分とはいないだろう、と、春日多津彦には、わかっていたからなのである。男は小宮警部補、雪ケ谷警察署の刑事課捜査一係長であった。春日多津彦の直属の上司、ということになるのだ。

「おみやげだ」

小宮係長が、箱を差し出した。カートン入りの、チューイング・ガムである。雪ケ谷署の人間で、春日のガム好きを知らない者はいないのだ。だが、小宮係長がガムをくれるとは、珍しいこともあるものだった。

刑事がガムを噛みながら捜査に歩くのは、日本の警察の伝統として是認できることではない。しかし、法律で禁じられているわけではないし、お前に限って大目に見てやろうと、春日は日頃から小宮係長に言われていたのである。

その小宮係長が、ガムを持って来たのだった。やはり、病人に対する甘さ、というものだろうか。あるいは春日が公務に復帰することは当分あり得ないと、小宮係長は判断しているのかもしれなかった。

「ありがとうございます」

春日多津彦は、カートンの箱を受け取った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「その後、変わりないかね」
小宮係長が言った。
「ご覧の通りです」
春日は、胸を張って見せた。
「退屈しきっているんだろう」
小宮係長は、苦笑した。
「退院許可が出ないのが、不思議みたいですよ」
春日は、窓の外へ目をやった。
「二、三日前に主治医の先生に、電話で訊いてみたよ」
「それで、結果は……？」
「あと一カ月、つまり八月いっぱいで、退院を許可してもいいだろうと、先生はおっしゃってた」
「あと一カ月もですか。それは、冗談じゃないんですかね」
「いや、真面目な話だ」
「まいりますね。もう入院して、三カ月なんですよ。完全なる健康体です。それなのに、あと一カ月なんて……」
「先生の話だと、外科的な意味では全治しているそうだ。しかし、お前は頭を打っているんで、その点でもう少し様子を見たほうがいいということだった」
「頭痛もないし、熟睡できるんですがね。頭のほうだって、心配はいりませんよ」
「いろいろと、気遣ってくれているんだ。ありがたいことじゃないか」
「しかし、あと一カ月もこのままでいたら、退屈の余り気が狂っちゃいますよ」
「贅沢を、言うなよ。こんなに結構な病室にいて、いたれり尽くせりの扱いを受けているんじゃないか。お前は、そんなことができる身分じゃない。普通なら、刑事には到底、望めない贅沢なんだぞ」
「そりゃあ、そうですがねえ」
「まあ、この機会にゆっくり、休養するんだな」
「ですが、四カ月の入院となると、休職になってしまうんじゃないんですか」
「その点は、大丈夫だ。お前の怪我は、公傷とは言えん。しかし、公務執行中の勤務時間内に、負傷したことは事実なんだからな。休職の扱いは、受けないよ」
「じゃあ一カ月後には、署に復帰できるんですね」
「当然だ」
「いま小宮班としては、忙しくないんですか」

「このところ、事件らしい事件はないな。だから、気にするな」
「そうですか」
「本庁捜査一課のベテラン刑事と、お前とは違うんだ。仮に何かあったとしても、雪ケ谷署の捜査一係はお前が抜けているからって、別に不自由を感じたりはしないさ」
小宮係長は、鼻の先で笑った。
「さあ、どうですかね」
春日多津彦も、ニヤリとした。
「じゃあ、また来るよ」
小宮係長はあっさり背を向けると、大股にドアへ足を運んだ。
「たびたび、すみません」
春日多津彦がそう言ったとき、小宮係長の姿はすでにドアの外へ消えていた。今日もまた、小宮係長は八分間しかいなかった。春日は窓のほうへ、身体の向きを変えた。いまの自分はこの雨みたいだと、春日多津彦はふと思った。
春日多津彦が事故に遭ったのはちょうど、三カ月前の四月三十日であった。時間は午後十時二十分、場所は大田区雪ケ谷二丁目だった。
そのときの春日は、強盗傷害事件の容疑者の恋人の住まいを監視して、張り込んでいたのである。
午後十時十五分に、その女がアパートから出て来た。慌ててているようだったので当然、春日は女を尾行することにした。女は中原街道へ出て、すぐにタクシーを停めた。そのナンバーを確かめながら、春日も別のタクシーを摑まえようとした。
そこへ、一台の乗用車が突っ込んで来たのである。春日は、跳ね飛ばされた。路上に叩きつけられて、彼は意識を失った。そのまま近くの救急病院に運ばれて、応急手当てを受けたのであった。
翌日、春日はほかの病院へ、移されることになった。治療や精密検査に、万全を期すためということだった。当然、春日は警察病院へ移されるものと思っていたが、彼が運ばれた先は、狛江市にある私立の総合病院であった。
あとになってわかったことだが、事故を起こしたのは未成年だったという。運転しながら同乗のガール・フレ

ンドと口喧嘩を始め、そのために前方不注意による事故を起こしたのである。

ところが、その未成年の若者が私立の総合病院『恵仁堂病院』の、事務長の息子だったのだ。そこで誠意と責任を持って、恵仁堂病院で春日多津彦を治療したいという申し出があったわけである。

すでに事故そのものは、刑事事件として成立している。加害者側が医療施設を提供したいというのは、民事の示談などの場合に誠意として認められることであった。だから、その申し出を拒む理由もない。

問題は、春日の怪我の恢復にある。それには、誠意と責任を持って治療にあたるという申し出に、応じたほうがよかった。その結果、春日は恵仁堂病院の狛江分院へ移されることになったのである。

春日の負傷は、左腕と肋骨の骨折、全身打撲であった。彼は狛江分院の外科病棟特A病室に収容され、外科部長が主治医となった。まさにいたれり尽くせりで、誠意と責任を持っての治療でもあった。

まず最初に、肋骨の骨折が治った。次に、全身打撲の痛みが取れた。挫傷もすべて、完治した。そして左腕が、元通りになった。三日前には、左腕のマッサージも終了した。三カ月で一応、全治したのである。

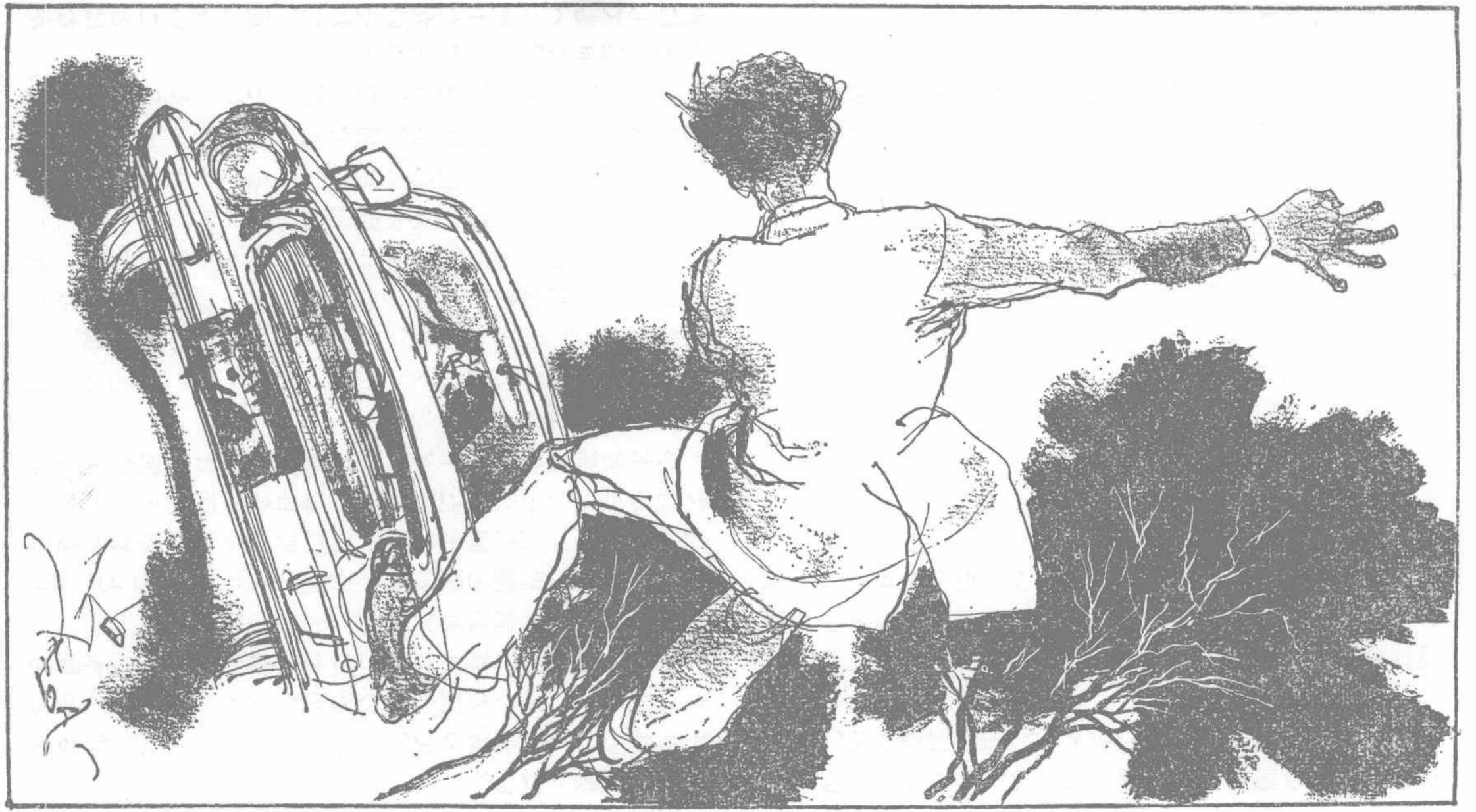
だが、小宮係長の話によると、退院は一カ月も先のことらしい。主治医の外科部長は、後遺症を心配しているのだ。頭を打っているからである。あと何回か頭の精密検査を行なって、異常も見られないようであれば、退院を許可する考えなのだろう。

あと一カ月——。

春日多津彦は、雨の中の風景を眺めながら、昼飯を食べた。刑事とは、孤独なものである。だが、捜査活動の中での孤独感は、嫌いではなかった。誰も頼ることができない疎外感、そして気持ちが張りつめているときの男の孤独を、春日は愛していた。

しかし、いまの孤独感は雨降りの日のように、陰気で湿っている。男の孤独には、ほど遠かった。退屈で、何の張合いもない。一日を終えたという充足感がなければ、自分の存在価値まで見失いそうであった。

また、ドアがノックされた。春日は、立ち上がっていた。誰かが来てくれたと、直感したのである。その春日が応じないうちに、ドアは押し開かれていた。部屋の中



へ、男と女が入ってきた。
「よう」
白に近い水色の背広に、濃紺のネクタイを締めた男が手を上げた。小木曾高広であった。その脇にいるのは、赤いブラウスに白いスラックスをはいた若い女だった。女優にしても珍しいほど整った顔立ちで、華やかな美貌の持ち主である。
「しばらくね。ご無沙汰しちゃって、ごめんなさい」
女がバラの花束を手にして、春日のところへ駆け寄って来た。見た目には間違いなく女だが、声はかすれていて男であった。

2

顔も小さいし、喉にも突起がない。ほっそりとした首である。身体も全体に小柄で、スカートをはいていれば脚線の美しさが見られる。腰が張っていて、尻にも女らしい厚みがあった。
第一、白い肌が女のものだった。化粧は濃いが、美しく整った女の顔である。胸も適当に、ふくらんでいる。声にしてもハスキーな女のそれで、通らないことはなかった。名前は、ミナであった。
しかし、ミナは戸籍の上で男だったし、本名は中川秀雄である。それに性格が、男であった。さっぱりしていて、陽気なのだ。義侠心に富んでいるし、行動的で度胸がよかった。それに、頭の回転が早かった。
誰からも信頼され、好かれるというタイプだった。年は自称二十四歳で、六本木のゲイ・バー『ローゼ』のママであった。乳房だけが、人工である。女には一切、性的興味を覚えないという。そうかと言って、男色の傾向があるわけでもないのだ。
小木曾高広が『ローゼ』の常連で、春日も何度か連れて行かれた。そうした関係で、春日多津彦はミナと知り合い、親しい友人同士となったのである。小木曾と春日とミナは、不思議と気が合う奇妙なトリオなどと、『ローゼ』の連中に言われていた。
小木曾高広は、春日と同じ二十九歳である。小木曾もまた長身で、彫りの深い顔の好男子であった。ちょっとバタ臭いところがあって、渋味もある顔なのだ。甘さがあって、男っぽい。

それが女から見ると、たまらない魅力らしい。小木曾の男の色気には痺れると、年齢や職業の別なく女たちが異口同音に言う。春日にしても、小木曾のように女にモテる男は、ほかに知らなかった。

小木曾と知り合った女は残らず、好意以上の感情を彼に持つ。そのうちの三分の一は、女のほうから積極的に働きかける。残りの三分の二は一方的に夢中になっているか、小木曾がその気になることを期待しているかである。

だが、小木曾のほうは、ひどく冷淡であった。女嫌いというより、浮気ができない性質なのである。いまのところ、結婚する意志はないらしい。あるいは、心に決めている女がいるのかもしれない。

そうなるともう、すべて浮気による関係になってしまうし、小木曾にはそれができないのであった。だから、女に対しては冷淡になる。冷淡にされると、女は逆に熱くなる。それで、さらにモテることになる。

小木曾に誘われて、断わる女はいない。彼に求婚されて、首を横に振る独身の娘はいないだろう。どこへ行ってもモテるし、縁談も絶えることなく持ち込まれている。まったくもったいない話だと、彼を知る男たちは嫉妬と羨望の言葉を口にする。

見た目の魅力、ムード、独身ということだけではなく、小木曾がモテる条件の一つに経済力があった。小木曾の父親の善造は、東日本の山林王と言われている資産家だったのだ。

小木曾善造は株で派手に儲けた金を注ぎ込み、二十年間に各地の山林を買い漁って、今日の地位を築いたのであった。小木曾善造の所有の山林は、奥羽地方の六県、東京都を除く関東地方の六県、愛知と富山を除いた中部地方の七県に及んでいる。

最近になって、九州の山林にまで手を伸ばし始めたという。すでに大分、宮崎、熊本の三県で、取引きに乗り出しているらしい。六十五歳だというが精力の固まりみたいで、一風変わった人物だと聞いている。

小木曾善造は、小木曾木材の会長と、小木曾建材の社長に就任している。小木曾木材の社長のポストは、善造の実弟の小木曾次郎に与えられている。もう一つ、全国の所有の山林を管理する小木曾商会の社長を、小木曾高広がやっているのだった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com